

吉蔵の浄土観に関する一考察

——仏身論を手掛かりに——

榎 屋 達 也

一 はじめに

阿弥陀仏の仏身仏土に関しては、中国の南北朝時代末期から隋・唐代にかけて種々に議論されてきた。浄影寺慧遠や天台智顛を始めとする、いわゆる聖道諸師が阿弥陀仏の身土を「応身応土」と位置付けるのに対して、道綽や善導といった浄土教家は、阿弥陀仏の身土をより位の高い「報身報土」に位置付けようとしたことは周知の通りである。

本来、仏とその拠り所となる国土は「身土不二」の関係である。すなわち、「身」(行為の結果＝正報)と、「土」(その身が拠り所としている環境＝依報)は切り離せないということである。したがって、浄土観を明らかにするためには、同時に仏身論との関係性をも考慮しなければならない。

特に隋代は訳経史上、旧訳の時代に相当し、各経論に説かれる仏身に関する訳語は異同が多く、⁽¹⁾同時に二身論から三身論への過渡期でもあり、仏身について様々な見解が生じた時

代である。平井俊栄氏は、中国における三身説の成立について、

中国に三身説が定着するのは、隋の三大法師たち、若しくはその直前の時代であって、現存する資料に依る限り、これら三者の説が中国仏教における本格的な三身論のはじまりであるといつて過言ではない。⁽²⁾

と述べている。このように時代の変化に伴い、阿弥陀仏をどのように位置付けるかという点に違いが生じ、それは訳語の異同だけではなく、時代背景や教学上の立場によって見解の相違が生じたものと考えられる。

従来の研究では、聖道諸師として吉蔵は阿弥陀仏の身土に対して「応身応土」を主張するとされてきた。しかし近年では、三論教学や吉蔵研究の蓄積に伴い、否定的な見解が示されている。例えば、袴谷憲昭氏は本迹思想の上から、伊東昌彦氏は「無得正観」という三論教学の上から検討し、従来の応身応土説に偏らない見解を示している。

特に吉蔵においては、仏身論及び浄土観はその複雑さから別々に議論されてきた傾向があり、そこに未だ検討する余地が残されている。したがって本稿では、近年の研究動向を踏まえ、特に今回は仏身論を手掛かりとして、吉蔵の浄土観に対する検討を試みたい。

二 吉蔵における仏身論

吉蔵の仏身論に関しては、三身説（正確には本迹二身）を採用していたとされるが、『法華玄論』巻九において、

若法華論明三身者、以仏性為法身、修行顯仏性為報身、化衆生義為化身。若撰大乘論所明、隱名如來藏、顯名為法身。則此二皆名法身。就應身中自開為二。化菩薩名報身、化二乘名化身。或云、化地上名報身、化地前名化身。〔大正蔵〕三四、四三七頁上）

とあるように、吉蔵が三身説の典拠として依用した代表的な論書は、主に『法華論』と『撰大乘論』である。また、慧遠が典拠とした『十地経論』に関しては、「地論法華論是菩提留支所出。撰大乘是真諦三蔵所翻。此三部皆天親之所述作、而明義有異者、或当訳人不体其意」と述べ、菩提留支訳である『法華論』と同一趣旨であることを明らかにしている。ここで問題となるのは、『法華論』や『十地経論』に見られる「法報應」の三身説と、『撰大乘論』に見られる「法応化」の三身説との対応関係である。『法華玄論』巻九には、

吉蔵の浄土観に関する一考察（榎屋）

今欲融會者、衆經及論或二身或三身或四身。今總束為四句。一合本合迹。如金光明但弁一本一迹也。故云眞法身猶如虛空。応物現形如水中月。二開本開迹。如五凡夫論明有四仏。開本為二身。一法身二報身。法身即仏性、報身謂修因滿顯出仏性。開迹為二身。化菩薩名舎那、化二乘名釈迦也。三開本合迹。如地論法華論所明。開本謂二身。謂仏性は法身、仏性顯為報身。四開迹合本。如撰大乘論所明。合仏性及仏性顯皆名法身。開迹為二、化菩薩名舎那、化二乘名釈迦。〔大正蔵〕三四、四三七頁中）

とあるように、吉蔵は各種経論に説かれる仏身説の不同について、『金光明経』や『五凡夫論』³⁾という諸経論の二身・三身・四身説を取り上げ、特に「本迹開合」の四句分別によって融會する立場を示している。

すでに見たように、吉蔵は三身説の典拠として、『撰大乘論』において「報身」と「化身」という名称を挙げていたにも拘わらず、ここではそれを用いていない。このことは、特に「本迹」の範疇について「迹身」を「舎那」と「釈迦」に開いている点より、その具体的な応化の内容を重視して以上の表現に変えたものと考えられる。また、報身の理解について『法華義疏』巻十には、

報身即是応身。応身有二。一者内、応謂与法身相応。是故経云、諸仏所師所謂法也。以法常故諸仏亦常。二者外、応謂与大機性相応。故为大菩薩於浄土中成仏。〔大正蔵〕三四、六〇三頁中）

吉蔵の浄土観に関する一考察（榎屋）

とあるように、吉蔵は「報身即是応身」として報身と応身を同一視し、更に「応身」に二種の別を開き、法身＝真如と相応する応身を「内応身」とし、菩薩を教化する応身を「外応身」と定義している。

「報身」の定義について特徴的なことは、吉蔵は「報身」よりむしろ「応身」という呼称に比重を置き、その応身について「内応」と「外応」の二種を説いたことである。この吉蔵の報身の概念は、各種経論の不同を統一し、報身の概念を著しく拡大したものであると言えよう。

三 浄土観との関連性

前節では吉蔵の仏身論、特に報身の理解について見てきたが、本節ではそれを踏まえた上で、浄土観との関連性について検討を試みる。なお、本稿では紙数の都合上、主として浄土教関係の文献である『観経義疏』所説の浄土観に焦点を当てたい。まず阿弥陀仏の浄土に関しては、

若就通門為論、無非酬因、可云報土。別門不然。何者以法蔵菩薩有本迹二門。就迹為論、在凡夫地以願造土、可云報土。…若論本門、此菩薩位居隣極、無更造業。唯是応現依正兩報。

〔大正蔵〕三七、一三五頁上

と、通門では酬因の報土であると言えるが、別門では法蔵菩薩には「本迹二門」があるとする。そして迹門では、凡夫地

の発願によつて建立された報土であるが、本門では、法蔵菩薩は隣極（等覺）の菩薩であり、更に業を造ることはなく、依正兩報は応現されたものでしかないとする。すなわち、法蔵説話の描写から読み取れる内容について、吉蔵は凡夫地と言(4)い報土であるとするが、本門では、十劫の昔より浄土が存在し続けているのではなく、今時の衆生に應じて依正兩報が現ぜられるという理解を示している。また、法蔵菩薩に「本迹二門」があるとする根拠としては、

問、双卷則云応云報土耶。答、此是応中開応報兩土。非是異応別有報土。何者一往弁土体謂之為報、於此報土示種種七宝為応土也。非是酬因之報故為報土也。若就所化修因往生義為論、可為報土。然所化因往生應土中也。

〔大正蔵〕三七、一三五頁中

と、『大経』にその根拠を求めている。吉蔵は（本門で指摘した）応土について、『大経』は）応報兩土に開き、応土の外に報土があるのではないとし、また（迹門で指摘したように）報土とも言えるが、それは酬因の報としての報土ではなく、衆生の修因往生の意味としての報土であり、その場合でも結局は（本門で指摘した）応土に往生するとしている。

一見すると、吉蔵は応土説を主張しているかのようにであるが、如来と衆生の立場において考察すれば、自ずから応土と報土の両面の見解が生じ得る。すなわち、衆生往生の立場からすると「報土」であるが、如来応現の立場からすると、衆

生はどこまでも「応土」に往生するということになる。

ここで前述の仏身論との関連性を考えてみると、阿弥陀仏の浄土について、本迹二門の立場より「応土（本門）」と「報土（迹門）」に分ける点と、その仏身論において、応身を「内応（報身）」と「外応（応身）」に分ける点が非常に類似していることが知られる。

四 おわりに

本稿では、吉蔵の基本姿勢（本迹思想や無得正観）を念頭に置き、仏身論を手掛かりとして、吉蔵の浄土観について検討してきた。従来、吉蔵の真意は「応身応土」にあるとの見解が大勢であったことは、道綽の『安樂集』巻上に「然古旧相伝、皆云阿弥陀仏是化身、土亦是化土。此为大失也」（『大正蔵』四七、五頁下）とあるように、吉蔵も「古旧」の説（化身化土説）に含めて考えられる傾向にあったことが原因の一つとして考えられる。

しかし、本稿において仏身論と浄土観の関連性を検討した結果、仏身論において、応身に「内応（報身）」と「外応（応身）」の二義を示したことは、阿弥陀仏の浄土について、応土（本門）の中に応土と「報土（迹門）」を開く構造と類似していることが明らかになった。すなわち、阿弥陀仏の浄土を本迹二門の立場より解釈し、本迹の「相即」関係を示す吉蔵独自

吉蔵の浄土観に関する一考察（榎屋）

の思想構造⁽⁵⁾は、仏身論において「報身即是応身」と規定し、その応身に「内応」と「外応」の二義を説いた点において明確に表れていると言えよう。

- 1 田村芳朗「法と仏の問題——仏身論を中心として——」（『仏教における法の研究』春秋社、一九七五年）三九一—三九二頁参照。
- 2 平井俊栄「吉蔵の仏身論——三身説を中心に——」（『仏教学』六号、一九七八年）四頁。
- 3 逸書。隋の法経等撰『衆経目錄』巻五に「五凡夫論一卷、右一論是人造偽妄」（『大正蔵』五五、一四二頁上）とあることから、中国における偽撰であったと考えられる。
- 4 藤田宏達『原始浄土思想の研究』（岩波書店、一九七〇年）三三六—三五三頁参照。
- 5 伊東昌彦「吉蔵の弥陀身土論」（『南都仏教』八八号、二〇〇六年）五七—五九頁参照。

〈参考文献〉

- 神子上恵龍『弥陀身土思想の展開』（永田文昌堂、一九六八年）
- 伊東昌彦『吉蔵の浄土教思想の研究——無得正観と浄土教——』（春秋社、二〇一一年）
- 丸山孝雄「吉蔵の法華遊意における仏身観」（『印度学仏教学研究』第二六卷第二号、一九七八年、五八七—五九四頁）
- 袴谷憲昭「吉蔵『観無量寿経疏』と浄土思想」（『三輪教学と仏教諸思想』春秋社、二〇〇〇年、一七一—一九一頁）
- 〈キーワード〉 吉蔵、『法華玄論』、身土不二、本迹開合

（龍谷大学大学院）